養蜂を通じて社会を学ぶ、行動する

本郷 亮

2022 年、終わりの見えないコロナ禍の中、屋内活動が厳しく制限されたため、私のゼミでは「**都市養蜂の社会的可能性**」と題した研究テーマを掲げた。実際に西洋ミツバチの養蜂をおこない、ハチミツ等を利用すると同時に、自然（エコロジー）教育や地域活性化に役立てるという計画だった。

ロンドンやパリなど欧州の都市では、役所やビルの屋上での都市養蜂は珍しくない（J. コックラル=キング『シティ・ファーマー：世界の都市で始まる食料自給革命』白水社，2014)。日本でも、東京銀座（紙パルプ会館，2006～)、大阪梅田（茶屋町ヤンマービル，2010～)、大阪心斎橋（大丸百貨店，2019～)、名古屋市役所（西庁舎，2026～）は有名だ。また学生によるキャンパス養蜂の例として、関西では、同志社大（烏丸キャンパス)、神戸女学院（今はしていない。10 年ほど前までは学祭でハチミツ販売もしていたそうだ)、京都芸術大がある。また関東では、特に日本大学経済学部（東京都千代田区）が 14 階建て校舎で一昨年から始めており、注目される（読売新聞，2026/6/24 朝刊「都心のビル屋上 蜂蜜採取」)。

さて、私たちはゼミの養蜂の場所として、まず**関学**にキャンパス内の適当な場所の提供をお願いしたが断られた。次に市会議員Ｓさんの協力も得て、何度か学生と**西宮市役所**へ赴いてお願いしたが、海辺の２か所の**ゴミ処理場**のいずれかであれば場所＋研究費を提供できる、というのが最終的な回答だった。さすがにゴミ処理場では無理だ。それに関学から遠く、学生が通えない。その後も、阪急西宮北口近くの**西宮公同教会**のＳ牧師、またＪＲ西宮近くの**市社会福祉協議会**の職員さんが、私たちの計画に賛同して下さり、大いに期待して説明に赴いたりもしたが、どちらも組織内全体の合意形成は困難なようで、これらもまた頓挫した。以上の経験は、学生たちには良い社会勉強になったと思う。

このような場所探しと並行して、2022 年初夏、西宮市船坂の養蜂家Ｔさんの所へ学生と見学に行った。Ｔさんは大変親切で、以後、私たちはＴさんから養蜂を学ぶことになる。しかし結局、大学付近に場所が見付からないため、ゼミ活動として養蜂をやるのは断念した。代わりに翌 2023 年春から市北端の**名来**（ならい）（大学から車で 30 分ほど）の耕作放棄地を無料で借りて、私が個人で養蜂を始め、たまにゼミ生を車に同乗させ連れてくるという形になった（写真１～４)。女王バチ付きの群（４万円）を３つ購入してスタートし、初年は 100 キロもの蜜が採れた。保健所で講習を受けて食品衛生責任者の資格を取り、役所に屋号も登録し、めでたく**起業**。当初は 1 キロ 2000～2500 円で業者さんに量り売りしたが、さすがに安すぎるので、半年後には自分で瓶やパウチに詰めて 200g1000～1300 円で**小売**するようになった（写真５・６)。また、ネット販売は色々手間がかかるため、現在は門戸厄神（東光寺）近くのパン屋さんに置かせてもらっている。

一言で「ハチ」と言っても、ミツバチは、スズメバチとは違い、非常におとなしいハチだ。前者は花の蜜や花粉を食べる**花バチ**（いわば草食）であるのに対し、後者は他の昆虫等を捕食する**狩りバチ**（肉食）だ。両者の性質は全然異なる。花バチは植物の受粉を助ける。ミツバチは恐ろしい虫ではない。私は、いつか学生たちが関学上ヶ原キャンパスのどこかで養蜂を実現するだろう、と楽観的に展望している。「根拠」などない。ただ、若い感性とチャレンジ精神を信じるのである。

１　西宮市名来の養蜂場



２　ハチの世話をする私



３・４　師匠のＴさんから学ぶ学生たち





５・６　ハチミツ商品（瓶とパウチ）



